

26Q-pm213

学生を対象とした薬に関する意識調査

○林 優樹¹, 島 和嗣², 久保 光平³, 畠山 貴博⁴, 大垣 旭⁵, 小松 知貴⁵,
澤田 采佳⁶, 小松 直登⁷, 木村 壮太郎⁸, 西野 ゆり⁹, 西野 正雄¹⁰, 菰田 綾佳¹¹,
宮本 如奈¹², 高倉 弘士¹³, 畠山 有理¹⁴, 畠山 光弘¹⁵(¹府立富田林高校, ²府立金剛高校, ³四天王寺羽曳丘高校, ⁴初芝富田林高校, ⁵府立河南高校, ⁶府立西浦高校, ⁷府立東住吉高校, ⁸府立藤井寺高校, ⁹府立長野高校, ¹⁰早稲田大基幹理工, ¹¹関西福祉技術大, ¹²同志社大文, ¹³立命館大産業社会, ¹⁴長崎大薬, ¹⁵畠山獣医科)

「はじめに」: 現代社会は、多様な薬が日常生活の中に溢れ、薬が医療費を圧迫する状況をも作り出している。高齢者や生活習慣病などに対する薬剤依存は、既に学生の中に形成された薬に対する依存性が遠因となっている可能性が考えられ、学生が日常的に薬に関する情報をどのように入手し、どのようなイメージを薬に対し持っているかを知ることは重要であると考えた。「目的及び方法」: 高校生及び大学生を対象とし、薬に関する情報の入手経路や薬に対する意識や知識を調べるためアンケートによる調査を行った。「結果」: 高校生の薬学部へ進学希望する割合は全体の割に満たない状況であり、福祉系大学生を含めて薬学部への進路を検討した事が全くない人が多数見られた。学生であるため大きな持病は見られず、日常的に薬を使用している人は少なく、ビタミン剤や整腸剤が中心であるが、風邪の時には薬を服用したり病院へ行くという人が、過半数を占め、薬や医師に依存している状況が垣間見られた。また、薬局と薬店の区別があまり明瞭に付けられず、CMで扱われているジェネリック医薬品やニュースで言われていた薬の販売方法の変更の情報も知っている人がかなり少なく、メディアによる情報すら伝わっていない現実が見られた。薬の連用などにより副作用を経験する者が散見され、便利だが危険だというイメージを持つ者が多く見られた。「考察」: 学生の多くが薬学部への進学を考慮した事がない現状は、薬やその使用に関して、薬を服用してきた体験からのみの情報でイメージを作り、積極的な薬に関する姿勢がないと言える。また、多忙な学生は、休養を十分とることよりも病院や薬を服用し、その場しのぎの日常生活を送っているが、このことが医者や薬に依存す傾向を若い頃から作り上げている危険性が危惧された。